

第3回病理解剖カンファレンス

画像診断が発達し、分子標的薬が日常診療に導入される今日、病理学の分野においても診断を確定するのみならず病変と病変の相互関係、すなわち疾患の病態生理や分子病態の解明が求められるようになってきました。そこで、本学での病理解剖症例を用いて病態生理あるいは分子病態の解明を主眼においた臨床病理カンファレンス (clinicopathological conference; CPC) を開催致します。第3回の病理解剖カンファレンスの要項を以下に記します。日常業務や講義・実習と重なることがないように、平日の午後6時から1時間ほどのカンファレンスとしますので、研修医や学部学生のみならず看護師や臨床検査技師の方々のご参加をお待ちしております。

人体病理学分野 坂下直実

記

第3回病理解剖カンファレンス (3rd clinicopathological conference)

日時：平成24年5月29日(火) 午後6時～午後7時

場所：青藍講堂

症例：5か月男児(剖検番号4059)

臨床診断：総肺静脈還流異常症術後+肺静脈狭窄

臨床担当医：北市 隆 Dr (心臓血管外科)

病理担当医：坂下直実 (人体病理学)

症例の解説

総肺静脈還流異常症のために生後10日目に心内修復術を行った。術後2か月より哺乳力低下と多呼吸が出現し、術後性肺静脈狭窄症と診断されたため肺静脈狭窄解除術を行うも肺静脈狭窄が進行し、肺高血圧クリーゼのために永眠された。術後性肺静脈狭窄の分子メカニズムを Hic-5 の過剰発現の観点から解明します。

問い合わせは人体病理学講座 (633-7064, byori1@basic.med.tokushima-u.ac.jp) にお願ひします。